

ワークショップ報告

「統計資料が語る中東・北アフリカ地域の社会変動」

【日時】2017年12月16日（土）15時00分～18時00分

【場所】上智大学四ツ谷キャンパス 10号館3階 301教室

【プログラム】

・白杵 悠（一橋大学大学院 博士後期課程）

「人口センサスから見える現代ヨルダン社会の変容」

・金 信遇（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻 博士後期課程）

「チュニジアにおける地域間格差の形成と変容の研究に向けて

—20世紀前半の人口統計から見えること—

・白谷 望（上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科 特別研究員）

「フランス保護領期の統計資料から見るモロッコ社会の多元性」

【コメンテーター】加藤 博（一橋大学 名誉教授）

「アラブの春」による政変後、数多くの研究者が革命の原因となった社会経済背景の分析を行ったが、革命後の研究のほとんどは革命を「事件」として捉え、その前後の短期間を分析対象としている。しかし、他の社会同様、中東地域の社会構造も近現代の歴史的連続性の中で形成、変容されてきたものであり、長いスパンでの分析が必要だと指摘されている。なお、近年の中東地域研究では方法論に関する議論が盛んに行われており、社会科学的手法を用いた研究も増加傾向にある。そのため、本ワークショップでは、中東地域の統計データを用いた上で、①当該地域における統計調査の歴史と特徴、研究資料としての有効性を明確にすること②統計データから読み取れる中東・北アフリカ社会の特徴と変容を分析し、各国間の共通点と相違点及び中東地域全体の特徴について議論することを目的として実施されたものである。

まず、白杵報告では、現代ヨルダン社会の人口構造の特徴と変容を人口センサスから観察した。移民、難民の流入による人口構造の変動と地理的分布変容の両方を分析することで、現代ヨルダン社会の重層性を理解するための土台を提示した。次に、金報告では、フランス保護領期チュニジア国内各地域の入植者人口、現地住民の人口変動を時系列に沿って説明した。現代チュニジア社会の最も大きな問題とも言われる国内地域間格差の起源を探るため、時代別各地域の人口面における特徴とその変化を提示した。最後に、白谷報告では、同じくフランス保護領におけるモロッコの統計資料を用い、主に1930年代と40年代、モロッコの行政区分及び各地域の人口変化について説明した。独立以後の複数政党制のもとで、非常に多くの政党が存在し、選挙ごとに既得勢力が変わっていくモロッコの状況を、社会の多元性から説明することを試みた。

報告後は、中東の社会経済をご専門とされている一橋大学名誉教授の加藤博先生から、簡単な講義の後、各報告へのコメントをいただいた。中東社会を研究するためには、遠くから見るのと近くから見ることの両方が必要であり、そのズームを変えながら研究を進めることがいいという助言をいただいた。なお、各報告にて補完すべきデータおよび今後の課題についてもご意見をいただき、研究に対するマクロな考え方とミクロな手法、両方について有意義なコメントをいただいた。

最後の全体討論の時間では、フロアからも数多くの質問と意見が集まった。中東研究者だけではなく、他地域を専門とする研究者や院生の参加もあり、各国の事情に関する討論と方法論に関する討論が両方行われた。

本ワークショップは、既存の中東研究ではあまり取り扱われてこなかった「人口」及び「人口調査」をテーマに取り上げたということに意義があった。コメンテーターの加藤先生からも「中東・北アフリカ社会を観察するために人口やセンサスを用いると、とても面白い研究ができる」というお言葉をいただき、本研究の可能性が再確認できた。ただ、報告自体は、まだ試験的アイディアの共有に留まるものであり、より具体的及び学術的に議論をまとめる必要があるため、本ワークショップで学んだことを今後の研究に活かしていきたい。